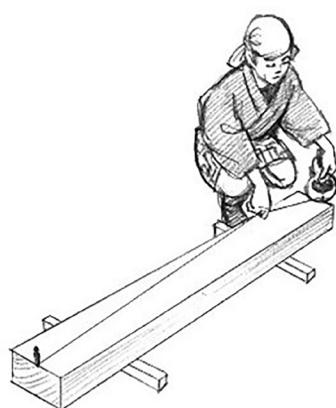


天理参考館第100回企画展「教祖140年祭記念 幕末明治の暮らし」①

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

「天理参考館から」と題して、参考館（以下、当館）が所蔵する資料にまつわる事柄を綴ってまいりました本シリーズも、おかげさまで40回を迎えました。昭和5年（1930）に中山正善天理教2代真柱によって創設された当館は、世界各地の生活文化への理解を深めるために、95年の歳月を経て、古今東西の民俗資料、考古美術資料を収集、保存、展示してまいりました。昭和62年（1987）から始動した、収蔵品のなかからテーマを立てて展示を行う「企画展」も、1月5日に開幕した「教祖140年祭記念 幕末明治の暮らし」展（以下、本展）で100回を迎えることになりました。教祖140年祭の本年、令和8年（2026）初頭に、記念すべき第100回企画展として本展を開催する次第です。これを区切りとして、次号をもちましてこのシリーズを終了する運びとなりました。長い間のご厚情、誠にありがとうございました。

本展では教祖のご誕生から明治20年までの間を時代設定にし、その頃に使用されていた様々な生活道具や、その時代の雰囲気を色濃く反映した文物を3つの章に分けて紹介します。まず第1章は「イラストから見る暮らし」、続いて第2章は「モノから見る暮らし」、最後の第3章では「おやさまと年祭」と題して展開しています。教祖140年祭特別展示「おやさま」とは異なり、教祖ゆかりの品々はありません。しかし、『稿本天理教教祖伝』に出てくるモノの実物資料や、教祖の道すがらに関係する道具類、「みかぐらうた」

図1 墨壺 奈良 明治～大正
(天理参考館蔵品)図2 墨付けの様子
(イラストは天理教道友社提供)

や「おふでさき」に登場する用語にまつわる生活道具などを展示しています。

例えば、「おてふり」で大工仕事に関係する動きがしばしば登場します。「ふしん」は手斧を振って木材を削る動作です。「だいく」は腰をかがめて指で弾く所作をしますが、これは大工が墨壺を使う様子を示すものです。墨壺は木材のケガキ線として直線を引く道具で、法隆寺が建立された古代から現代に至るまで重宝されている歴史的な道具の一つです。定規と鉛筆などを使って木材に直線を引こうとして

も、木目の凹凸に阻まれて線が歪んでしまいますが、墨壺を使うと木目に影響されずに直線を引くことができます。まず、猿子と呼ばれる針を、線を引き始めたいところに刺して固定します。続いて本体を猿子から引き離して糸を引き出します。墨壺の糸巻から繰り出される糸が、墨がたまつところを通過することで墨を含んで出でてきます。線を引きたいところで糸を引き出したら、伸ばした糸の真ん中を指先で軽くつまんで本体を木材にあてます。固定できたら、糸をつまんだ指を軽く弾くと糸全体が木材にあたり、墨が木材に転写されるという仕組みです。

また、教祖伝に「十四歳で里帰りされた折には、着物は派手な振袖であるのに、髪は三十女の結う両輪であったから、村人達は、三十振袖。と、私語き合った」とありますが、この両輪という髪型は、江戸時代後半から大正時代にかけて、主に京都や大阪を中心とする上方で結われた既婚女性のヘアースタイルで

図3 両輪の女性『女子風俗化粧秘伝』
(天理図書館蔵品)

す。当時は髪型や化粧、着物を見ると、どの身分か、未婚か既婚か、子どもがいるかいないかが一目瞭然という個人情報全開示の時代でした。天理図書館が所蔵する『女子風俗化粧秘伝』（文化10年刊）では、良家の夫人が振袖姿で立つ姿が描かれているので、まだ14歳という年若い年齢で晴れ着として振袖を着る場合もあったかと思われます。この書物は、顔立ちに合った化粧法や髪型を図解入りで詳細に記述した本で、関東大震災で版木が消失するまで重版を重ねた大ベストセラーでした。櫛は、飾り櫛とブラッシングするお手入れ用の櫛とは別で、スターリング用の櫛は丈夫な黄楊材が多く、種類も多様です。当時のおしゃれグッズも本展でぜひご覧いただきたいと思います。

図4 柄鏡、鏡掛、櫛類 江戸～大正
(天理参考館蔵品)

本展の資料を通して、幕末明治という激動の時代に生きた人々の暮らしに思いを馳せ、同時にこれから時代を歩む私たちの指標の一つとなれば幸いです。次号に続きます。